２０２５年３月２３日　第４主日礼拝　黙示録４章１－１１節　説教「天の御座に着いている方」

今日は黙示録 4:1－11 から「天の御座に着いている方」と題して３つの点でみことばを取り次ぎます。

１．天の御座に着いている方　１－６a

4 章-22 章は、ヨハネが天に上り、天で見た光景を記しています。2-3 章は 7 つの教会への実践的な手紙でした。一方、4 章からは象徴的な幻が次々に現れます。ヨハネが 4 章から見た天での光景は、天の視点をもって地上の出来事を見ることを教えています。4 章と 5 章は天における神の栄光の幻です。

「1 その後、私は見た。すると見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラッパのような音で私に語りかけるのが聞こえた、あの最初の声が言った。『ここに上れ。この後必ず起こることを、あなたに示そう。』」ヨハネは 7 つの教会へのイエスの教えを聞いた後、天にある開かれた門を見ました。そして 1 章で聞いたラッパのような大きな音で語りかけるイエスの声を聞きました。イエスは「ここに上れ」と開かれた門を通って、神のおられる天に来るようにとヨハネを招きました。その目的は「この後必ず起こることを、あなたに示そう」とあるように、ヨハネに将来必ず起こることを知らせるためでした。

「2 たちまち私は御霊に捕らえられた。すると見よ。天に御座があり、その御座に着いている方がおられた。」ヨハネのからだはパトモス島にいながら、不思議なことに彼の霊は天に引き上げられました。パウロは第三の天であるパラダイスに引き上げられる経験をしました。ヨハネも天に上り、天上の光景を詳しく教えられたのです。天には御座があり、そこには御座に着いている方、すなわち父なる神がおられました。

「3 その方は碧玉や赤めのうのように見え、御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった。」碧玉や赤めのうは神の栄光を表しています。またエメラルドのような虹は神の契約の印であり、神はご自分の契約を守られるあわれみ深いお方であることを表しています。

「4 また、御座の周りには二十四の座があった。これらの座には、白い衣をまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老たちが座っていた。」神の御座の周りに座る 24 人の長老たちとはだれでしょうか。21 章を見ると天の都の 12 の門にはイスラエルの子らの 12 部族の名前が記されています。また都の城壁の土台石には 12 使徒の名前が刻まれています。両者を合わせると 24 です。このことから、24 人の長老たちは旧約と新約のすべての神の民を象徴的に表していると考えられます。彼らはキリストの血によって罪をきよめられた白い衣をまとっています。また頭には神が勝利を得る者に与えた金の冠をかぶっています。

「5 御座からは稲妻がひらめき、声と雷鳴がとどろいていた。御座の前では、火のついた七つのともしびが燃えていた。神の七つの御霊である。」御座からひらめく稲妻と、とどろく声や雷鳴は、神の臨在と権威を表しています。七つのともしびは神の七つの御霊です。7 は完全数であり聖霊なる神の完全性を表しています。この御霊が 7 つの教会に語られました。

「6a 御座の前は、水晶に似た、ガラスの海のようであった。」水晶に似たガラスの海は、神の勝利と平和を象徴しています。神によって闇の力は打ち破られ、嵐は止み、ガラスの海のように穏やかな平和が訪れるのです。

第 1 の点で教えられることは、天の御座に着かれる神がこの世界を統べ治めておられるということです。黙示録の時代はローマ帝国が当時の全世界を治め、皇帝ドミティアヌスは自らを神として、絶大な権力をふるっていました。彼は自分を礼拝することを民に強要し、皇帝礼拝を拒むクリスチャンを迫害しました。しかし天に目を向ければ、全世界を治めておられるのは御座に着かれる神です。そのことを知ることはクリスチャンにとってどんなに心強く、勇気が与えられたことでしょうか。

今日も同じです。地上には政治、経済、軍事力や社会的な権力を持つ者が、世界を動かしているかのように見えます。しかし、全世界を治めておられるのは地上の人間ではなく、天の御座に着かれる神です。神はこの世界をみこころの内に治め、やがて正しい審きをされます。さらに私たちに神のみこころを教え、みこころをこの地で行うために祈り、労するように励まされます。ですから私たちは天の御座に着いている神を見上げ、天の視点をもって、この地でみこころを行うために生きていきましょう。

２．四つの生き物の礼拝　６b－８

６b－８は御座の周りにいる 4 つの生き物の礼拝が記されています。6b－8「6b そして、御座のあたり、御座の周りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。7 第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は飛んでいる鷲のようであった。8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りと内側は目で満ちていた。そして、昼も夜も休みなく言い続けていた。『聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者。昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。』」

御座の周りにいる 4 つの生き物とは何でしょうか。旧約聖書を見るとヨハネが見た 4 つの生き物は、エゼキエル 1 章と 10 章に出て来るケルビムと、イザヤ 6 章に出て来るセラフィムに似ています。ケルビムもセラフィムも神に仕える御使いです。ですからヨハネが見た 4 つの生き物も神に仕える御使いです。

4 つの生き物は昼も夜も休みなく、神を賛美し、神を礼拝していました。「聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者。昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。」神は完全な聖さを持っておられ、世界を統べ治める全能者です。また過去、現在、未来にわたり永遠に存在し、すべての被造物を完成へと導かれます。

イザヤ 6 章で、イザヤは高くあげられた御座に着いておられる主を見ました。その時セラフィムが「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる」と賛美しました。それを見たイザヤは言いました。「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王をこの目で見たのだから。」するとセラフィムが祭壇の上から火ばさみで取った燃え盛る炭をイザヤの口に触れさせて言いました。「見よ。これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された。」祭壇の上から取った炭は罪を赦すためにささげられたいけにえの炭です。そのいけにえは神の子羊イエスを表していました。

来週見る黙示録 5 章には屠られた子羊が天の御座の真ん中におられることを見ます。私たちも屠られた子羊の血によって罪を赦され、きよめられ、白い義の衣を着せられるので、「聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者」とやがて天で神を賛美します。さらに、今地上でも聖なる神を賛美するのです。このようなすばらしい特権が私たちに与えられていることを覚えて、心から聖なる主を賛美しましょう。

３．24 人の長老たちの礼拝　９－１１

「9 また、これらの生き物が栄光と誉れと感謝を、御座に着いて世々限りなく生きておられる方にささげるとき、」4 つの生き物は栄光と誉れと感謝をささげて礼拝していました。すると今度は 24 人の長老たちも礼拝に加わりました。「10 二十四人の長老たちは、御座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝した。また、自分たちの冠を御座の前に投げ出して言った。」天において聖なる栄光の神を礼拝するとき、24 人の長老たちは御前でひれ伏します。それは自分を低くし、神にすべての栄光を帰すためのふさわしい態度です。さらに彼らは、神からいただいた勝利の冠をかぶりながら神を礼拝するのはふさわしくないと考え、冠を取って御座の前に投げ出しました。これも自分を低くし、神にすべての栄光を帰す礼拝の姿です。

私たちは今礼拝の中でひれ伏すことはしませんが、心はへりくだり、自らを低くして、謙遜に神の前に出ることが大切です。そして礼拝においてすべての栄光を神に帰し、神を礼拝するのです。水は高い所から低い所に流れます。同様に、私たちも神の前に低くへりくだって礼拝する時、神の恵みは私たちの心に流れてきます。

24 人の長老たちは 4 つの生き物とともに主を賛美しました。「11 主よ、私たちの神よ。あなたこそ栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたが万物を創造されました。みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。」地上では皇帝ドミティアヌスは、自らを「私たちの主なる神」と民に呼ばせて礼拝させました。そのため、皇帝礼拝を拒んだヨハネをはじめ初代教会の信者は迫害され、苦難にあっていました。しかし、目を天に向けると、私たちの神である主はただ一人、天地の創造者なる全能の神であり、御座に着かれる神だけが礼拝されています。このことは地上にあって主なる神だけを礼拝する民にとって、大きな励ましとなりました。神だけが栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方です。

また、神は万物の創造者であり、神のみこころのゆえにそれらは存在し、創造されました。このことはすべての被造物には神が与えた存在理由があることを教えてくれます。私たち一人ひとりは、神のみこころのゆえに存在し、創造されました。聖書は、私たち一人ひとりは、母の胎の中で神が形造り、いのちを与えて誕生したことを教えています。なぜ今私たちがこの世に存在し、生きているのか、それは神がみこころ、すなわち神の計画と目的をもって私たちを造ってくださったからなのです。そのことを聖書を通して知る時に、私たちは自分の存在理由と存在の意味を知ることができます。そして今日教えられえることは、私たちの存在理由は、私たちの造り主なる神に感謝し、神を賛美して礼拝することです。

礼拝は日曜日の 1 時間だけではありません。日曜の礼拝から始まるのです。一週間どこにいても、私たちは主を賛美し、感謝し、礼拝して生活します。みことばを通して神のみこころを学び、神が自分に与えておられるみこころを行う生活をするのです。神に栄光を帰す礼拝は、神に栄光を帰す生活に向かい、神の栄光を表す人生となります。この地上での礼拝と生活が、天上での礼拝と生活につながります。やがて主イエスが再臨されるときには、イエスは私たちにも天の開かれた門を示し、「ここに上れ」と言われます。その時私たちは天に引き上げられ、御使いとすべての神の民と一緒に、永遠に神を礼拝します。その時を待ち望んで、神に栄光を帰す地上での礼拝と生活を続けていきましょう。